令和６年度　尼崎市子ども・子育て審議会　第１回計画策定・推進部会　議事録

開 催 日 時	令和６年６月25日（火）　午後６時30分～
開 催 場 所	ＷＥＢ会議(zoom)
出 席 委 員	伊藤（嘉）委員、瀧川委員、大和委員、伊藤（篤）委員、松島委員、峯本委員、西田委員、梅本委員、濱名委員、藤原委員、仲波名委員、山縣委員、平之内委員
議　　題	１　ニーズ調査結果の概要について ２　（仮称）尼崎市こども計画について①（Ⅰ章・Ⅱ章） ３　こども意見聴取　本市の取組について（報告） ４　保護者アンケートの実施について（報告）
資　　料	資料１　尼崎市子ども・子育て支援に係るニーズ調査報告書　【速報概要版】 資料２　尼崎市こども計画（Ⅰ・Ⅱ素案） 資料３　こども意見聴取の取組について 資料４　保護者・養育者へのアンケート票 参考資料１－１　尼崎市 子ども・子育て支援に係るニーズ調査　（就学前の子どもの保護者）　～単純集計表～ 参考資料１－２　尼崎市 子ども・子育て支援に係るニーズ調査　（小学生の子どもの保護者）　～単純集計表～

開会

●事務局より委員の出席状況確認（全員出席）と傍聴者０について報告
●会長より議事録確認委員（梅本委員、濱名委員）指名
●事務局より配布資料の確認

議題１　ニーズ調査結果の概要について
●　資料１について事務局から説明。

委員
　８ページの問３「幼稚園の利用を強く希望する人は、回答者の約７割」について、全ての利用者の中で幼稚園の利用希望が７割いたという理解で良いか。

事務局

一つ前の設問で、〔現在の利用の有無にかかわらず、定期的に利用したいと考える施設や事業についてお答えください〕が複数回答となっているため、「認可保育所」と「幼稚園」の両方を選択している方もいる。そういう回答をされた方に幼稚園の利用を希望するかさらに聞いており、それで「はい」と回答された方が７割となる。幼稚園、預かり保育とは違う認可保育所や認定こども園を選んだ方に対して、特に幼稚園利用を強く希望する方が７割になる。

委員

３ページにフルタイムで働いている母親の割合が平成 30 年に比べ増えてきているということで、病児保育も例えば父親が休んで病気の子どもをみるという結果も出ている。３ページ問１の主に子育てを担っている人の項目では平成 30 年との比較がない。働き方はどんどん変化しているが、担い手は変わってきているのかが示されていないので、わかるようであれば平成 30 年と比較してどのように変わっているのか教えてほしい。

事務局

現在、全体の報告書と並行して作成しており、そこには掲載している。就学前では「父母ともに」が今回 55.3%、前回は 46.1%、「主に母親」が今回 43.8%、前回は 51.4%、「主に父親」が今回 0.3%、前回は 0.4%、「主に祖父母」が今回 0.2%、前回 0.5%、「その他」は今回 0.1%、前回 0.3%となっている。

委員

働き方に応じて担い手も変わってきているので、そのあたりも示していただけると、より変化がわかると思う。

事務局

今日のご意見も含めてさらにクロスで見たいものを追加して最終報告書としてまとめ、委員の皆さまにも資料として提供したいと考えている。

会長

「父母ともに」という回答が増え、「主に母親」が減少していることが、今回の調査結果では明らかになっていると思う。子どもが病気の時に仕事を休んで対応した人の割合でも、父親の対応が増えている。まだまだ主たる人は母親ではあるが、変化がみられるところは特徴的だと思う。

委員

女性のフルタイムは、確かに日本全体でも以前と比較すると増えてきていることはデータでもわかるが、尼崎市は中核市なので一般的な市町に比べてフルタイム就労の女性が多いのか。他都市との比較をしてもらえれば有難い。

事務局
　他都市との比較は現在できていないが、同様の設問をしている他都市の結果をみることができれば、資料に反映したいと思う。

会長
　今後の最終の報告書に向けてクロス集計をしていくということだが、10 ページの今後も不定期に利用したい事業で「保育施設の一時預かり事業」や「幼稚園の預かり保育」、14 ページの放課後の過ごし方について等の利用希望と保護者の就労状況のクロスはあるか。施設の利用希望と定期的な利用状況のクロスはあるが、今後の預かりについてのクロスが見たい。

事務局
　就労状況とのクロスはまだ入れていないので最終的には入れ込んでご提示したいと思う。

会長
　感想になるが、17～18 ページの「こどもクラブを利用している理由」で「利用料金がかからないから」とある。経済的な負担がなるべくないものを求める傾向が強まっている感じがする。景気も悪いし生活が苦しくなっていると思われる中で、そういう意味でも就労状況とのクロスが見たいと思う。あと、こどもクラブと尼崎市立の児童ホームで内容が違う部分と共通する部分があると思う。どちらにどんなことを求めているのか、似たようなニーズになってきているような気もするので、そのあたりも報告書でよく読み込みたいと思う。

議題２　（仮称）尼崎市こども計画について　①（Ⅰ章・Ⅱ章）
●　資料２について事務局から説明。

会長
　ウェルビーイングの注釈についての説明があった。ＷＨＯの定義があり、それをそのまま書くことも一つの正しいあり方かと思うが、ウェルビーイングには主観的なものと客観的なものがある。主観的なものは、幸福度や満足度といったその人の感じ方によるもの。客観的なものは、進学率や就業率、収入等のいわゆるデータで示せるものになる。尼崎市としてどういう状態がウェルビーイングな状態と定義するのか。この場合は「こどもまんなか」なので、子どもの主観として子どもの声を聴くところが中心になると思う。それらも踏まえて、この計画が目指すもの、基本理念の中に加筆すべきことや必要な点も含めて、ご質問やご意見をいただければと思う。

委員
　ウェルビーイングの観点ではないが、１ページの最初に、「収入の減少、学習環境の悪化、虐待件数」等と、よろしくないことが書いてあるが、ヤングケアラーのところだけ「対応」とあり

そこだけ異質なので、別の表現の方が良いような気がする。対応が遅れているとか、ヤングケアラー自体が深刻化している等、そういう言葉の方が良いのではないか。

事務局
　昨今、ヤングケアラーが言葉として認知されているので、問題が顕在化しているのではないかという意識があり、入れたところがある。ご指摘を踏まえて修正したい。

会長
　貴重なご指摘だったと思う。ヤングケアラーそのものが問題ではない。「対応」を抜いたとしても、住環境の悪化、こども虐待の増加にヤングケアラーと挙げると、家族の世話をしていることが悪いことみたいになってしまう。家族の世話をしている中高生の若者が違和感を覚える可能性がある。ヤングケアラーであること自体が悪いことではなく、そのせいで学校に行けていないとか、子どものウェルビーイングが損なわれていることが課題になるので、ここは書きぶりを工夫する必要があると思う。

委員
　ＯＥＣＤのプロジェクト２０３０の中で、ウェルビーイングには個人のウェルビーイングと社会のウェルビーイング２つの目標があったと思う。本市における目指す姿としては、尼崎市自体のウェルビーイングを高めていく、社会のウェルビーイングを高めていくという考え方を列挙しておくことも良いと思う。

会長
　ウェルビーイングの定義をレビューしながら、尼崎市の考える子どものウェルビーイングを具体的に掲げられると良いと思う。

委員
　今のウェルビーイングについて。「はじめの 100 か月の育ちビジョン」の中ではウェルビーイングはこういう言葉ですよと定義されている。それを持ってきても良いのではないか。もちろん、他の委員がおっしゃったように、それぞれ色々なところで使われているので、いろいろ見て整理する必要があると思う。ただし、説明が必要な言葉であることは私も思う。

委員
　総合計画の関連計画に障害も入っている。インクルーシブという言葉も最近よく言われているので、前段に入っても良いのではないか。
　あと、Ⅱの１「国におけるめざす姿」の一番下の行「「こどもの誕生前」から切れ目ばく」は、「切れ目なく」の誤字だと思う。

事務局
　修正する。

委員
　１ページ目の説明に「新型コロナウイルス感染症拡大の影響による収入の減少」とあるが、これが公開される７年度にこの文言で良いのか。むしろ今現在の大きな課題は、歴史的な円安に伴う物価高、実質賃金の減少ではないか。コロナの影響は来年であれば総体的に薄れて、むしろ円安問題が長期的に解決しないと言われているという前提の書き出しのほうが良いのではないか。

事務局
　国の資料等を見ながら書いているところもあるので、ご意見の通り、昨今の物価高により生活が苦しいという方が実感としても分析的にも合うと思う。今日的な社会情勢について修正する。

会長
　委員の皆様からのご指摘を踏まえて、修正版を事務局で作成してほしい。Ⅰ章・Ⅱ章については、一旦これで確定ということで良いか。誤字・脱字は修正しながら、ウェルビーイングの注釈についてはメール等でご相談しながら整理していただいて、審議会の全体会で報告するという流れで良いか。

事務局
　誤字・脱字や表現についてご指摘があったように、昨今の情勢に基づき内容を検討した上で、すぐ対応できるものは対応して文章を固めていきたい。ウェルビーイングの解説については、尼崎市なりのウェルビーイングを上手く表現しないと、計画の本筋に密接するところだと思うので、単なる和訳というよりはもう少し色々な意見が入ったものもありかと思った。そのあたりは、時間をいただいて今後協議しながら固めたい。先々はデザイン的な構成も行い、他の章も順次加えていく。その都度アップデートしたものをお送りし、必要があれば都度修正し、最終的に秋ごろには素案が一旦完成のところまでいきたいと考えている。

議題３　こども意見聴取　本市の取組について（報告）
●　資料３について事務局から説明。

委員
　子どもに意見聴取をする時に、何故こんなことに答えなければならないのか、何のために聞いているのかを理解してもらうために、「こういう意見を聴くことによってこうなる」と分かりやすく伝えることができる説明文があれば良いと感じた。

事務局
　国も子ども意見聴取の手引きを作って発表しているが、そもそも資料をどう作れば良いのか、どうアプローチすれば良いのかが分からないので、そのあたりは試行錯誤になる。基本的には着手しやすいところからになると思うが、市の中で取組が広がっていくことが一つの目標だと思う。意見表明できる環境整備を徐々に整えていくことが、大きな取組の一つと考えている。

会長
　今のご指摘はすごく重要だと思う。こども家庭庁ができる前から他の自治体で子どもの意見をインタビューやアンケートで聴取してきたが、「これを言って何になるの？」という質問が結構ある。アンケートでもそうだが、回答してそれが実現するのとか、どうなるのか、どうにもならないのであれば書いても意味ないと言われる。何のために声を聴くのか、聴いた声をどうするのか。子ども達から聴いた声を全部叶えることは当然できない。そのあたりのフィードバックや説明も含めて、事前にわかりやすく説明した上で意見を聴取できるように、そこの建付けはすごく大事だと思う。事務局で検討願いたい。

事務局
　ご意見の通りだと思う。闇雲に色々とすることは、現実的に難しい。きちんと準備して着手することをまず進め、少しずつ実績を出して、それが広がっていくことが良いと思う。できる範囲でできるところから取り組んでいきたい。

委員
　例えば漫画を利用して説明すると理解しやすいのではないか。漫画も、尼崎市といえば全国的に有名な尼子先生に協力をお願いする等しても面白いと思う。

委員
　尼崎市のこどもの育ち支援条例を策定するにあたり、尼崎市の子ども会議、ティーンズミーティングを実施していたように思う。同じような子どもの意見を聴取するための会議が実施されていたが、その時の会議がどんな感じで行われていたのか教えてほしい。

事務局
　ティーンズミーティングは、中学校・高校に出向いて意見を聴取してきたが、意見を言いにくいという課題があった。今はそれを再編し、ユースカウンシル事業として実施している。子どもや若者が自分達の身近な課題を挙げて、それについて調べ、最終的に市に提案するという形に再編しており、子どもたちが意見を言える場は今現在、既にある。オンラインのプラットフォームもユースカウンシル事業とリンクさせながら、よりパワーアップして実施していきたいと考えている。

委員

幹事会でチラシをいただいたが、ここには学校と連携してオンラインだけではなくワークショップをということで、南と北の案内が書いてある。授業との連携については触れられていないが、校長達への説明はどの段階でいただけるのか。

事務局

小学校・中学校・高校の各段階で具体的に学校の取組とどう連携するかという、そこまでの建付けはまだできていない。現段階でいつとお示しすることは難しい。ただ、この計画自体が令和７年度から 11 年度までの計画期間となるので、今年度中に提案しながら準備をしていく流れになると思う。今すぐにとは考えていないが、子どもたちに意見表明する場があることを一番わかりやすく示すためには、学校と取り組むことが最も有効だと思っている。やり方は検討が必要だが、学校にとっても良かったと思えるwin-winの関係ができれば有難い。

委員

未就学児等への意見聴取に入ると思うが、声を聴かれにくい子ども、困難を抱えている子どもや若者の声も拾い上げることが、この中に文言として入っている方が良いと思う。例えば、未就学児等のところに「困難を抱えている」とか「多様な」とか、表現の仕方は難しいが、マイノリティだと自分の声は聴かれないと思ってしまうので、そう思われない記載が必要だと思う。

事務局

修正前の資料では「声を聴かれにくい子ども」と書いていたが、「未就学児等」の方が通りが良いと思い修正した。国のものは「声を聴かれにくい子ども」と前面に出ているが、初見で読んだ時にわかりにくいので、注釈として欄外に書くのが良いのか、国のものをそのまま踏襲するのが良いのか、検討中である。ご意見等があれば、是非教えていただきたい。

委員

確かに「声を聴かれにくい子ども」と書くのは一般的にもわかりにくいし、当事者からしてもどうかと思う。表現は難しいと思うので、考えてみたい。

会長

確かに「声を聴かれにくい」というのは、わかりにくい。ただ、未就学児と限定してしまうと、「声を聴かれにくい子ども」はそれだけではない。障害のある子ども、不登校の子ども、地域で大人と出会う機会が少ない子ども、外国籍の子どもなど、色々いる。どんな子どもも取り残さない「こどもまんなか」社会を作っていくことが、こども基本法の理念にある。どこにも入らないと、子どもたちが読んだ時に思うような文言や内容は避けたい。未就学児の意見表明、意見聴取については、言葉だけでなく例えば絵を描いたり、違うツール使った取組を検討している。ターゲットをわけて書くのも違う気がしている。③の「多様な手法」のところの、「より多くの子ど

も」の書きぶりに、もう少し「すべての子ども」という意味合いを付けた言葉にすることで何とかならないか。

事務局
　編集のスタイルも想定しながらになると思う。直球で表現することが良いものと悪いものがあり、しつこく事例をあげるようなものになると、読んでいてしんどい。含んだ言葉で上手く表したい。イラストを横に入れると良いのかもしれないし、悩むところではあるが、今後検討したい。

議題４　保護者アンケートの実施について（報告）
●　資料４について事務局から説明。

委員
　《妊娠期～未就学期》の「３　妊娠期からのサービスや支援の充実」は、例えばどういうサービスになるのか。具体的なところがわかりづらい。それと、「１　異なる年齢の子どもとの交流」と「２　親子が安心して集まれる身近な場や機会の充実」の区別がわかりにくい。

事務局
　まず、３は妊娠期なので、家事援助や相談事業等、色々なものを含めすぎているきらいがあるかもしれない。１と２も親子が集まれるということは、どちらかといえば親目線で、お母さんがホッとできるような集まりをイメージしている。「異なる年齢の交流」となると、未就学児なら０～２歳から保育所や幼稚園等で交流していることもある。もう少し追記するか、想定の具体を検討して出すようにするか、意見を参考に検討したい。

委員
　10 番に子どもの医療費について書いてあるが、妊娠期から未就学のところにこのサービスが含まれるのであれば、整理してもらえればと感じた。

会長
　アンケートは誰が読んでも同じものを思い浮かべることができるよう、具体的なものやわかりやすい表現に変更した方が良いと思う。事務局でご検討願いたい。

委員
　問８の「こどもの意見を反映させるためにどのような場があれば良いと思いますか。」について。先ほどの子どもへの意見聴取の取組で市が考えている方策の具体的な内容をここに入れるのはどうか。

それと、問 13 にニーズ調査の項目はどのように反映されているのか。

事務局

意見聴取の取組については、今年度は試行実施であり、まだ一般化しているものではない。７年度以降も市としてこれをやっていくと確定したものがないので、ここは一般的にどういうものがあれば良いか親世代に聞くイメージになる。具体的にこうだと聞くことは避けている。

ニーズ調査との関係性については、ニーズ調査の項目はある程度国で決まっており、それに基づいて実施している。この調査は、尼崎市として今後施策を決めていく時の優先順位をつける参考とするために実施するものである。先ほどの医療費助成は、最初は親の経済的支援と括っていたものを、給食の無償化と医療費で分けて掲載したものである。ニーズ調査とは目的が違うものになり、データ的に整合させるようなものでもない。

会長

委員の意見等を踏まえて、事務局で修正した上で進めてほしい。

意見等が出尽くしたようなので、以上をもって令和６年度第１回尼崎市子ども・子育て審議会計画策定・推進部会を終了する。

事務局

これから具体的に計画の文章を入れていく段階になる。次の第３章は、市の取組を体系化して書いていく部分になる。優先順位や内容についてまだオーソライズできていない段階なので、市長も含めて早急に方向性を決め、ご提示したい。そこからいろいろなご議論になると思う。次回の日程や内容についてはまだ言えないが、進捗があり次第お伝えする。

閉会

以 上